

ピーター・トム・ごん狐

— 国民的童話の主人公について —

関 英 雄

話は二八年前にさかのぼる。本誌「文芸論叢」二七号の拙稿「赤い鳥再考」にも書いた昭和四〇年春の東京・新宿伊勢丹百貨店での「子どもの文学この百年展」（毎日新聞主催、

文芸各団体後援）の準備段階での話だ。後援諸団体のうち、専門家団体である日本児童文学者協会（略称児文協）と、日本児童文芸家協会（児文芸）の二団体が、各数名づつの実行委員会を選出して、三九年秋から展覧会の具体的構想を練った。後援といっても実質主催者並みの仕事だった。

何度めかの実行委員会で、たしか実行委員長の坪田譲治氏（児文協）の提案だったと思うが、「展覧会場の入口のフロアに、日本の子どもならだれもが知っている有名な童話の主人公の、大きな張りぼて人形を立てたらど

うでしょうか。」という案に、「それはいいアイデアだ」と、委員一同賛成した。児文協の実行委員の一人として出席していた私も、むろん大賛成だった。

ところが、さて、日本の子どもの全部でないまでも多くが知っている童話の主人公というのが、考えてもだれにも思いつかばないのだ。坪田童話に登場する善太、三平の兄弟はおなじみだが、これを子どもの多くが知っているとは言いがたい。宮沢賢治はその知名度

からいって、或は国民的童話作家と言い得るかもしれないが、「風の又三郎」の又三郎少年が、日本の子どもたちのアイドルにまで至っているだろうか？ どうも否である。

結局、だれもが知っている童話の主人公の桃太郎か、当時の子どもたちを席捲していた

漫画の鉄腕アトムくらいしか該当者が居ないという事になった。昔話は近代児童文学ではないし、鉄腕アトムは劇画でジャンルが違う。私も、桃太郎やアトムでは困ると発言した一人で、期せずして一同の口にはのびたのは、児童文学の先進国である欧米諸国が、それぞれの子どもの多く、いやおとなも知っている国民的童話の主人公を有していることだった。

ジェームス・バリの「ピーター・パンとウエンディ」（一九一一）の主人公ピーター・パンは永遠に年をとらない子どもの妖精で、その無邪気、快活、冒険心と正義感はずべてのイギリスの子どもの理想像である。イギリス児童文学の歴史の展覧会を開くとすれば、会場の入口にピーター・パンの像を立てても

極めて自然である。ヨーロッパ旅行の折り私
も見たが、現にロンドン・のケンジントン公園
には、永遠の子どもピーター・パンの立像が
ある。

イタリヤだったらコッロデイの空想物語
「ピノキオ」(一八八三)の主人公の木の人形
ピノキオの愉快な悪童ぶりは、起伏のあるス
トオリイの中に子ども本質とその成長を描
いて、イタリヤのみでなく広く世界の子とも
たちに愛されている。フランスは少し迷うが、
よく知られている子ども主人公なら、日本で
も広く読まれてきたエクトル・マロの「家な
き子」(一八七八)のレミであろう。ドイツ
なら、今世紀になつてからの、エーリヒ・ケ
ストナーの「エミールと少年探偵たち」(一
九二九)の主人公の少年エミールか。少女主
人公ならスイスのヨハンナ・スピリの「ハイ
ジ」(一八八〇)がある。

ピリットから生まれていて、今も広く少年た
ちの共感を呼ぶ。

こう見てくると、「子どもの文学この百年
展」から十八年たった今も日本は絶望的であ
る。だが待てよと考えたのは、つい最近であ
る。新美南吉(昭和一八年、三〇歳で病没)
の童話「ごん狐」(一九三二)の主人公の子
狐ごんは、ピーター・パンやトム・ソーヤー
のような、その国の多くの子どもの理想像と
いうわけにはいかないが、もし今「近代日本
児童文学史展」というような展示会が開催さ
れたら、その会場入口にごん狐の像を飾って
もいいのではないかと思つたのだ。ただの子
狐像ではお稲荷さんの狐とまちがえられかね
ないから、ごんの物語に因んでいたずら子狐
ごんの首に鰻が巻きついている像にしたら、
ひと目でごん狐とわかる。

ためか。——「ごん狐」は三十年來小学校の
国語教科書に載つてきたこともあり、子狐が
主人公の話は子どもに親しみやすい。

第二の理由は、伝統的日本の風土に根ざし
た、日本庶民の人情と道徳観に訴えている点
で、おとなにも広く読まれていることだ。そ
の点で日本の童話の典型といえる。罪の償
いのために献身的に百姓兵十に奉仕するごん
が、兵十に誤解されて鉄砲で撃たれて死ぬ結
末に、子ども読者はみな「可哀そう」という
主人公の不幸な死を子どもの多くは好まない
が、それでも衝撃的な悲しい話ゆえに子ども
心にも深く印象づけられる。ごんはその死の
瞬間に初めて兵十の信頼を得るのだから、こ
れは単純な悲劇ではない。——私がピータ
ー・パンに及ばなくても、ごん狐ならと思う
に至つたのは、近年この作品の読まれる率が、
ますます増えてきたからでもある。

ごん狐を挙げる第一の理由は、一つの作品
だけ取りあげれば、過去現在にわたつて、
「ごん狐」は突出して広く読まれている童話
だからだ。新美南吉は宮沢賢治に次いで今も
多く読まれている作家だが、一作だけでい
え「風の又三郎」も「ごん狐」ほどには日本
中の子どもの中に浸透しているとは思えない。
方言の会話が註釈なしにはおとなにも難解の